

15 (令和元年度現地ほ場試験) 冬期野菜現地試験

試験の目的

当センターが作成した『旭川市内におけるビニールハウス内の冬季野菜栽培マニュアル』に基づき、市内2か所のほ場における実証試験を行い、同マニュアルの検証及び本市における冬期野菜栽培普及に当たっての基礎資料を得ることを目的としました。

なお、本試験は、本市農政部農業振興課の冬期野菜栽培実証事業の一環として実施したもので、本試験は2年目の実施です。

関係先 市内生産者・市内直売所

現地試験の概要 (栽培品目はどちらもコマツナ)

	場所	作期	トンネル	共通
現地圃1	東旭川町日ノ出	①9/27 播種 ②10/3 播種	使用	二重ハウスでの 無加温栽培
現地圃2	永山町	①9/28 播種 ②10/5 播種	不使用	

試験結果 (概要)

令和元年度の気象経過は、マイナス20℃以下の強い冷え込みはなく、作物が厳しい寒さにさらされる頻度は平成30年度より少なくなりました。

現地圃1では、気密性の高いハウスで内張カーテン及びトンネルを11/14から12月中旬まで閉めきりで管理し、トンネル内の平均気温が2.6℃から11.2℃に保たれたことにより、コマツナの生育が進み、11月下旬には出荷可能な大きさとなりました。一方で、12月下旬から葉柄に褐色の斑点が出る症状、1月からは低温により葉柄が凍裂する症状が発生し、これらはコマツナが急な寒さに耐えられなかったため発生したと考えられました。

そのため、コマツナの株がある程度の大きさに生育した後は、内張カーテンやトンネルを使用せず、適度に低温にさらし馴れさせること(低温馴化)が必要です。

現地圃2では、1作目の播種時及び播種後のかん水がやや少なく、ほ場が乾いていたことから、発芽が遅く、そろいも良くありませんでした。発芽後も、生育初期の葉がねじれるなどのかん水不足による症状が見られました。2作目の播種時及び播種後は十分にかん水したため、良好に生育しました。現地圃1とは異なり、トンネルを使用せずに栽培したところ、生育は緩慢でやや小ぶりでしたが、現地圃1の症状は発生せず、2月の出荷時でも良好な品質を保っていました。



現地圃1 (R1/12/23)



現地圃2 (R1/12/23)

まとめ

販売可能な品質が維持された収穫期間

11月上旬から2月上旬まで

販売額の試算

現地圃生産物は1株当たり概ね5袋入り、平均単価110円で販売されました。現地圃の栽植株数9,259株/aから、全株販売できた場合の販売額は1a当たり203,698円と試算されます。

生産者の感想

メリット：安定した売れ行き、収穫作業性の良さ

デメリット：コマツナの低温馴化を促すトンネル管理の手間

課題：内張カーテンやトンネルの適切な開閉管理、出荷率の向上(10月以降の播種を避ける、適切な水分管理等)

収穫開始時点の収穫物の様子 (11月26日撮影)

現地圃1



作期1 (9月27日播種)

現地圃2



作期1 (9月28日播種)

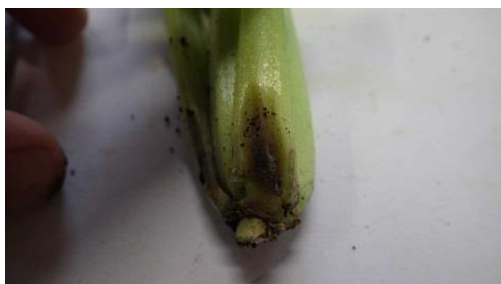


作期2 (10月3日播種)



作期2 (10月5日播種)

発生した病害及び障害



コマツナの褐色斑点症状



コマツナの葉柄の凍裂